



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代日本語交感発話の社会語用論的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	肖, 潔
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15525号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89363
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jie_Xiao_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 肖 潔

学位論文題名

現代日本語交感発話の社会語用論的研究

本論文は、日本語における *phatic communion*（交感的状態または交感機能）を担う発話また言語行為を多角的に研究した成果である。予備的議論・形式面の理論的考察・運用面の考察（初対面時について）・運用面の考察（知人関係について）・結論の5部構成で、17章からなる。

まず第1章「序論」では研究背景・研究目的・研究方法のほか本論の研究上の位置づけなどを論じ、論文全体の構成についても記述している。第2章では、先行研究も含め、*phatic communion* の由来やこれまでの扱いをマリノフスキーからファース、ヤコブソンなどを参考にまとめ、本論では交感機能が現れる発話を広く「交感発話」と称して、挨拶やラポールトーク、共感性やスタンスなどとの関連に言及している。以上が第I部となる。

第3章では、挨拶（表現）との交感発話の関係を「あいさつ」また「あいさつ表現」として掘り下げ、交感発話の観点から定義を定めた上で、文体やジャンル、場面、言語形態、方向性、趣旨などを踏まえて分類基準を立てている。第4章では、日本語における交感発話の分類を行っている。一般に、交感発話には情報性がないか希薄だと言われてきたが、実際の会話の中では相応の意味内容を伴うことが多い。この点を踏まえて「情報性」という観点を立て、これに「社交性」「目的性」「共感性」などを加えて、交感発話を典型的なものとそうでないものに分け、後者は疑似交感発話と準交感発話に下位分類している。疑似交感発話はさらに3種類に下位分類し、一般にポライトネスの戦略に組み込まれるこれらの交感発話とは異なる、インポライトネスに分類されるものを反交感発話として位置づけることも提案している。

挨拶とみなされる交感発話の多くが慣用表現になっていることを踏まえ、テンス表示が可能かどうかを扱っているのが、第5章である。「おはようございます」のように一部方言を除けばタ形にならないものが見られるほか「ありがとうございます」のように、タ形と非タ形が存在し、対立する（これをテンス分化と呼ぶ）ケースも見られる。テンス分化の有無を左右する要因を、本論では、対立の概念と機能負担量による経済性の原理で説明している。ほかに関連するものとしてポライトネス理論とリモートネスの観点を取り入れ、多角的に論じている。

第6章では、慣用化した挨拶表現のスタイルについて分析している。日本語の丁寧表現はデス・マス・ゴザイマスのような敬体を使うが、その場合、「お疲れ様だ」に対する「お疲れ様です」のような切替型と「おはよう」に対する「おはようございます」のような付加型の二種類を区分することができる。この区分は日本語の品詞体系全般にも適用可能で、例えば、形容詞は付加型であるが、形容動詞は切替型であって、一般化できる原則でもある。中には「さようなら」のように通常丁寧化ができない、よってスタイル分化しないものが少なからず含まれていることも指摘されている。

「こんにちは」は「今日はご機嫌麗しゅうござります」などの冒頭部分の残存だが、現代語ではスタイル分化を持たないとみられている。ところが、「こんにちは」「どうも」などは「(こんに) ちわっす」「どうもです」のようなネオ敬語を含む丁寧形式付加によって二次的に付加型でも使われていることが事例分析によって指摘されている。「いただきます」は「いただきますをする」のように、食事を開始するの意で使われる変化が生じているが、これは引用部が名詞化する統語変化でもある。

「お疲れ様」はゼロ形のほかに「です」や「でございます」の付加はあるものの、挨拶表現としては「お疲れだ」のようにコピュラ付加形式を用いない。これはコピュラの語用論的制約としてとらえることができる。一方で「おはよう」は「ございます」を付加する方式のほかに、「おはようさん」としてゼロ形あるいは「です」を付加する方式が見られる。これらはいわゆるネオ敬語と見なすことができる。

第7章では「ございます」が構文化・語用論化していくプロセスを歴史的観点から考察している。第8章では、「です」の付加によるスタイルの変化を論じている。本来、「すみません」や「申し訳ありません」は丁寧体なので、これ以上丁寧形式を付加する必要はないはずだが、コーパスには「すみませんです」「申し訳ありませんです」などが見られることを指摘し、「どうも」の付加型によるスタイル分化とともに分析している。「どうもです」は、「どうも」単独の場合よりもやや遠隔化するポライトネスの操作でもあり、新奇の表現による俗語性から過度に遠隔化せず、距離の調整による親近感の表示を担うと本論は捉える。「すみません」の「です」付加は、むしろ丁寧さよりも俗語性による近接化機能を利用していると分析されるが、これは「いりません」よりも「いらないです」が選好されている要因も作用していると見る。「こんにちはです」も丁寧さによる遠隔化よりネオ敬語的な近接化が機能していると分析している。紋切り型のクリーシェよりも近接化にシフトする傾向は他の「初めましてです(ね)」などにも見られる。

第9章は「なんか」が副詞から談話標識へに拡張していき、交換発話に寄与するプロセスを論じている。「なんか」はフィラー的機能を有するとともに、スタンスマーカーとして、マウントをとらない姿勢などから話しやすい雰囲気を醸成するなど背景的な交感機能を発揮する要素として分析され、おおむね会話開始部に集中的に現れると従来考えられてきた交感発話に加えて、情報のやりとりとなる会話の中核部にあっても、交感性を保持し、弱化を回避するために、語用論的な標識が利用されることを示す論考を行っている。

第10章では、同章現象として、オーバーラッピング、重複応答、極性反転、タイプ非一致型応答などを観察・分析している。以上が第Ⅱ部で、前半の中核となる論考である。

第Ⅲ部(第11章～第13章)は運用面の考察として初対面のケースを、第Ⅳ部(第14章～第16章)は知人関係がすでに形成されているケースを、それぞれ具体的事例として分析している。

第11章では初対面場面の会話開始部での「はじめまして」「すみません」「こんにちは」の事例分析を取り上げ、第12章では3種類のタイプ(A 相互に情報を有している関係、B 役割分担が明確な場面、C 相互に情報がなく役割分担も定まっていない関係)に分けて会話開始部のやりとりを分析している。「はじめまして」は今後継続的に人間関係を形成していく場合にしか使われないので、タイプAでの限られた場合にしか用いられないとされる。第14章は会話終結部での交換発話を分析対象としている。

第14章では、既に知り合いになっている関係での会話開始部を、第15章では同じく会話終結部を、それぞれ分析対象とする。交感発話は開始部に現れることが多いが、家族間などでは見られないことも多く、笑いなどの非言語的なものが目立つことが事例分析から報告され、終結部では、解決すべき課題がある場合とない場合とで異なることが、事例の分析から指摘されている。第16章はデータを議会議事録からとったもので、議会発言における雑談の機能を分析している。

第Ⅴ部「結論」となる第17章では、これまでの論述を全体的にまとめ、今後の課題を記した上で、論を閉じている。

以上